

# パソコン要約筆記利用者意識調査 報告

2016年10月

特定非営利活動法人 全国文字通訳研究会

曾根 博

全国文字通訳研究会では2016年8月11日から17日にわたり、パソコン要約筆記の利用者を対象としたインターネットを利用したアンケートを実施しました。その後、インターネットを利用できないパソコン要約筆記の利用者に対し、FAXを利用した同一内容のアンケートを8月16日から21日まで行いました。

## ■調査概要

【調査期間】 2016年8月11日～8月21日

【調査対象】 聴覚障害者

【調査方法】 ①インターネット調査。Googleフォームを使用しインターネットで回答を募った。全国文字通訳研究会のホームページ、会員メーリングリスト、聴覚障害者コンピュータ協会のメーリングリスト、SNSで呼びかけた他、聴覚障害者を対象としたいくつかの集会でGoogleフォームのアドレスをQRコードで印刷した依頼票を配布した。  
②インターネット回答ができない人のために全国文字通訳研究会のメーリングリストに設問用紙を投稿。無記名でFAXによる回答を受け付けた。

【有効回答数】 有効回答数117人  
うち聴覚障害者103人、健聴者14人  
うち聴覚障害者でパソコン要約筆記利用者は98人

## ■結果の要約

- パソコン要約筆記では短く要約した入力も全文に近い入力もできることが、そのことを「知らない」人が12%。
- 利用者の51%が「いつでも全文に近いものが欲しい」と思っている。「ケースバイケース」は42%。
- 聴覚障害の程度が重い人ほど全文を求める傾向が強いようだ。
- 不利益を被ったことがある人は3割という無視できない数字。
- パソコン要約筆記の利用時に要約か全文か要求したことがある人は約3割。要求しても「要求が通らなかった」は約4割。要求しなかった人の多くは「そのような要求が可能だとは知らなかった」。

この報告書は、これらの結果をまとめたもので、8月27日に開催された、全国文字通訳研究会関東地区集会での発表を元に、大幅な加筆修正を行っています。

## 1.実施方法

インターネットを利用したアンケートは、Googleフォーム上でアンケートフォームを作成し、それへの回答を広く依頼する形で実施しました。

回答の依頼は、大別して、①全国文字通訳研究会メーリングリストを通じて会員に回答と知人などへの紹介を依頼。②全国文字通訳研究会ホームページ上に回答先のリンクを作成し呼びかけ。③理事を中心に各自でSNS、クチコミ等で回答を募集。④期間中に開催された聴覚障害者関連の集会でアンケートフォームのアドレス及びQRコードを記載したメモを配布、等の方法によりました。

FAXを利用したアンケートは、上記の依頼に対してインターネットの利用が困難であるとの連絡を下された方に対し、回答用紙をFAXで送信し、記入したものをFAXで返送してもらう形で実施しました。

## 2.回答者プロフィール

### 2-1.回答方法別件数

合計117件の回答がありました。インターネットを利用した回答は107件、FAXでの回答は10件でした。これ以降、回答方法を区別せずに記述します。

### 2-2.有効回答数

回答者のうち、聴覚障害者からのものが103件、そのうちパソコン文字通訳を利用したことがあるとする回答が98件(95%)でした。これ以降、特記の無い限り、この98件についての記述になります。

### 2-3.性別

回答者の男女比は男性47、女性51でほぼ同数でした。

### 2-4.居住地

回答者の居住地は、東京と神奈川が各22件ずつで、以下回答の多かった順に、埼玉8件、千葉7件、大阪6件、鳥取5件、長野4件、京都・兵庫・山口が各3件、茨城・岐阜・佐賀が各2件、北海道・栃木・群馬・新潟・静岡・和歌山・岡山・熊本・沖縄が各1件でした。

### 2-4.聴覚障害の種別と年齢

回答者の聴覚障害の種別と年齢層は、次の通りでした。「難聴者」「中途失聴者」「ろう者」のカテゴリ分けは、回答者自身の選択に拠っています。

	難聴者	中途失聴者	ろう者	無回答	総計
20～29歳	1	1	1		3
30～39歳	2	1	4		7
40～49歳	7	1	7		15
50～59歳	10	7	2		19
60～69歳	12	11	3		26
70歳以上	14	13		1	28
合計	46	34	17	1	98

### 2-5.聴覚障害の程度

回答者の聴覚障害の程度については、自覚的な判断が可能な、右表の5つの「定義」から選んで頂きました。

この結果、軽度または中度に分類される回答者数がかなり少なく、聴覚障害の程度と回答との関連を分析するにあたって、相当程度の誤差が加わることになります。

	人数	定義
軽度	8	良好な環境では、補聴器などを利用しなくても音声でのコミュニケーションが可能
中度	4	たいていの場合、補聴器などを利用すれば音声でのコミュニケーションが可能
高度	36	良好な環境で補聴器などを利用すれば音声でのコミュニケーションが可能
重度	33	音は認識できるが、補聴器などを利用しても音声でのコミュニケーションは困難
全ろう	17	補聴器などを利用しても音は全く聞こえない
合計	98	

## 2-5.手話の使用

手話の使用については「使っている」65件、「使っていない」26件、「手話を知らない」6件、その他・無回答1件でした。

使用している手話について、どのような手話で通訳を受けたいかとの問いに対して「日本語対応手話(日本語の口形と同時に表現される手話)」40件、「中途失聴・難聴者向け手話講習会等で教わった通りの手話」9件、「日本手話(ろう者が利用する手話)」7件、「特に気にしない」9件、その他・無回答33件でした。

## 3.集計結果

### 3-1.利用場面

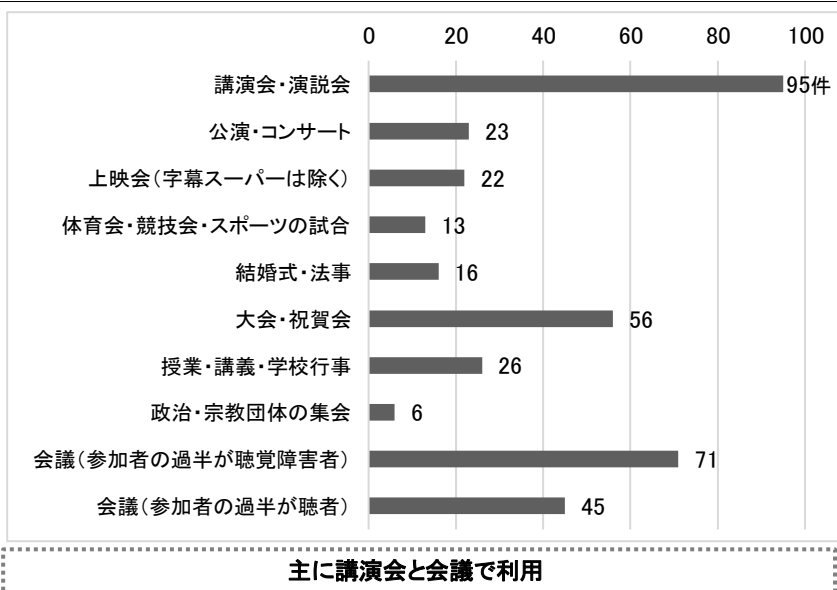
Q.どのような場面でパソコン要約筆記を利用したことがありますか？

どのような場面でパソコン要約筆記を利用したか複数選択での回答を求めたところ、講演会・演説会と会議が多数を占めました。

選択肢中「講演会・演説会」は95件と回答者の大半が選択。「会議」二種の少なくともいずれか一つを選択した方は、80人でした。

選択肢以外の利用場面としては、「例会」「役員会」「美術館でのギャラリートーク等」「図書館団体の集会」「診察」「トークイベント」「お通夜・葬儀」「病院受診」「商品体験説明会」「天体

観測」「公共施設等でのDVD視聴」「県議会での傍聴」「手話読話の勉強」「役員会(サークル)」が挙げられました。これらは集計には含めていません(「トークイベント」を「公演・コンサート」に含めてはけません)。



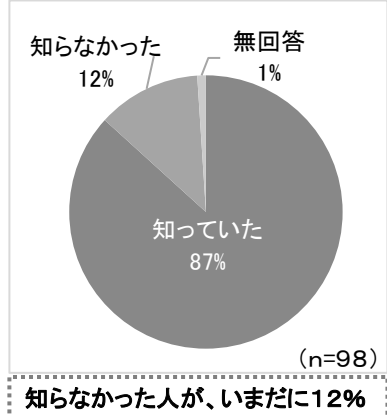
### 3-2.要約・全文の認知

Q.パソコン要約筆記は短く要約することもできますし、全文に近い要約筆記もできますが、そのことを知っていましたか？

パソコン要約筆記について、要約した文章を提示することも、全文に近い形で提示も可能なことを知っているか尋ねたところ、「知っていた」が85件、「知らなかった」12件、無回答が1件でした。

パソコン要約筆記が、要約を重視する形で実施されることも、全文に近い形で実施されることもある点は、相当に認知されていると言えそうです。

一方、「知らなかった」の12件についても、決して少数とは言えません。パソコン要約筆記を利用する上で、選択肢の存在を知らないことは、利用者本人に合った情報保障を利用できないことと同義です。引き続き、周知が必要だと言えましょう。



### 3-3.要約・全文の希求

Q.あなたはパソコン要約筆記でどの程度要約したものが欲しいですか？

要約を重視する形で実施されるパソコン要約筆記を希求するか、全文に近いものを求めるかに対する回答は、「いつでも全文に近いものが欲しい」50件、「ケースバイケース」42件、「いつでも短くまとめたものが欲しい」5件、無回答が1件でした。

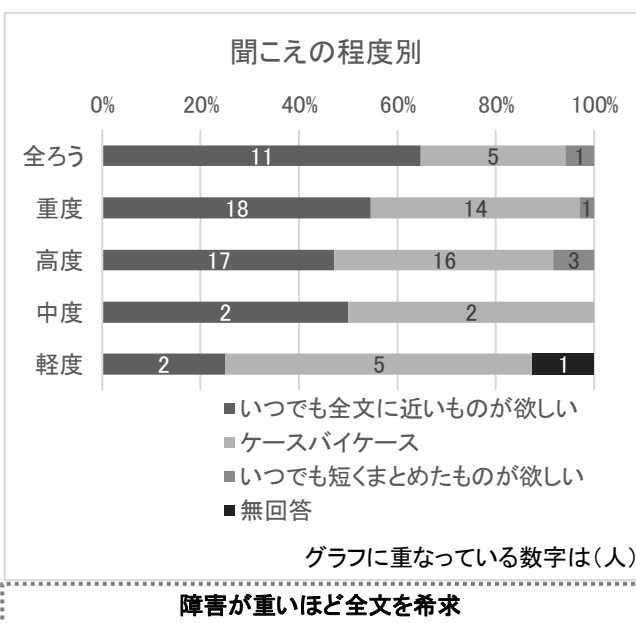
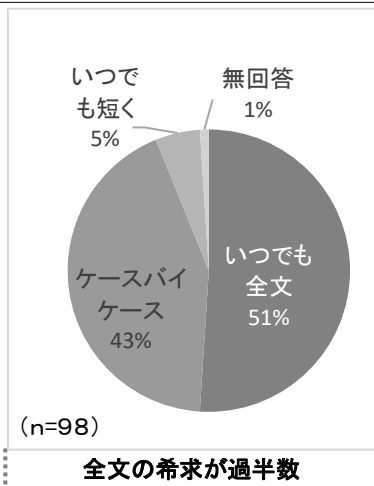
回答者の半数以上が常に全文に近い形を求めている上、ケースバイケースとの回答も状況によっては全文に近い形が求められることを意味しますので、全文に近い通訳の必要性は高いと言えます。「いつでも全文に近いものが欲しい」と「ケースバイケース」を合計すると、実に94%になります。

一方、ケースバイケースとの回答が4割強と、要約を重視したものを求める場面が相当あることが示され、少数ながら常に要約を重視したものだけを求める回答もあります。

これらの傾向から、全文に近い形と要約を重視したものの双方を必要に応じて選択可能であれば、より多くの利用者のニーズを満たせると考えられます。

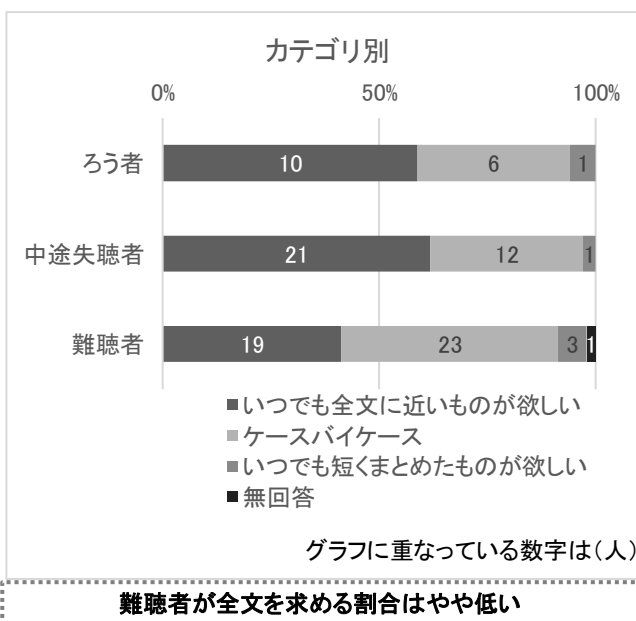
これを聴覚障害の程度別に集計すると、軽度および中度の回答者が少ないため確実ではありませんが、おおむね障害の程度が重いほど全文に近いものを求める傾向が読み取れます。

すなわち、文字による情報保障の必要性が高い人ほど、全文に近いものを求めていると言えそうです。



回答者自身が、ろう者、中途失聴者、難聴者のいずれのカテゴリに相当するか選んでもらった結果との対照では、ろう者と中途失聴者とがほぼ同様の傾向を示し、難聴者は全文に近いものを求める割合が相対的に低い結果となりました。

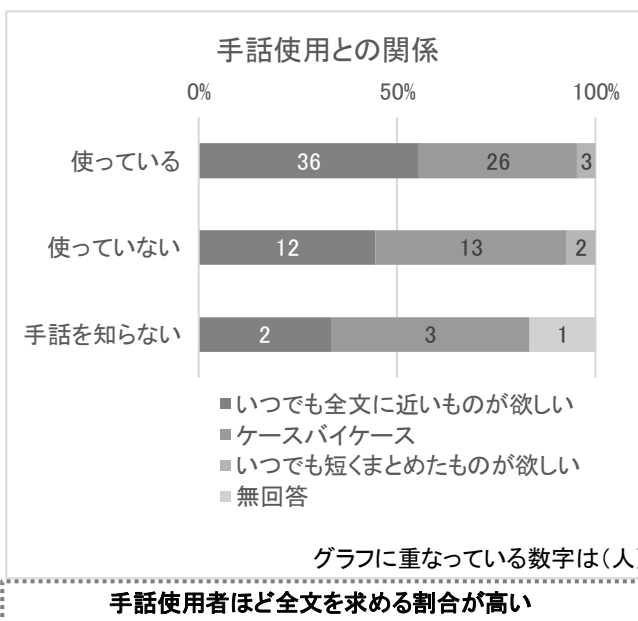
従来、一部ろう者の日本語を読む力と関連付けて、要約によって平易なものを提供することの必要性が言われていましたが、これを否定する結果となっています。ただし、このアンケートは日本語で行われており、自身をろう者とした回答者も日本語を十分に使いこなせていると考えられることは、考慮する必要があります。



手話の使用との関係では、手話使用者ほど全文に近いものを求めているという結果になりました。

手話を習得し日常的に使用することに必要な労力は、音声のみの場合と比較して相対的に高いと考えられます。この結果は、それでも手話を覚えて使いたいとする、コミュニケーションに対してより積極的な層ほど、全文に近い形を求めていると言えそうです。

ただし、聴覚障害の程度と手話の使用の間にも相関が予想されますが、今回のアンケートでは、これを含めた分析にはサンプル数が不足しています。この点は、今後の課題となります。



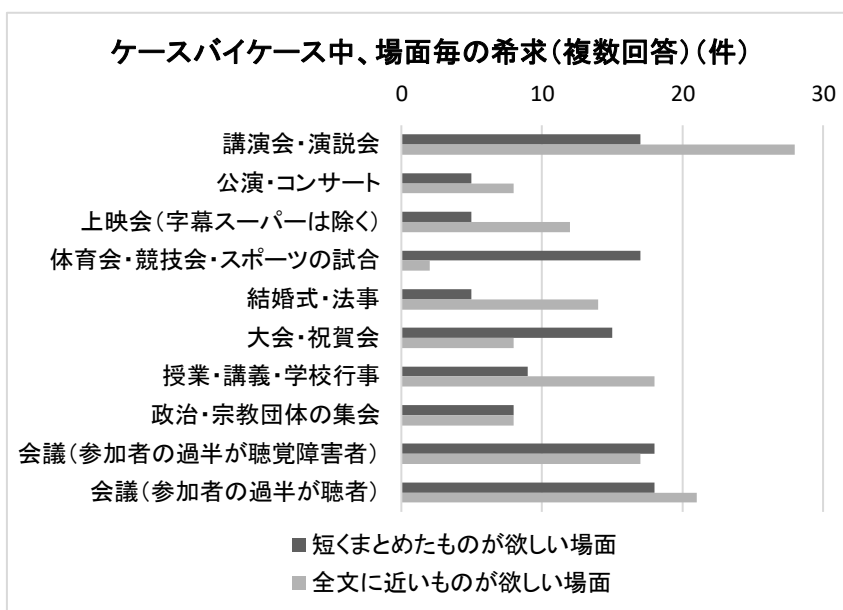
### 3-4.場面による要約・全文の希求(ケースバイケースに対して)

Q.短くまとめたものが欲しいのは次のうちどれでしょうか？

Q.全文に近いものが欲しいのは次のうちどれでしょうか？

前項の問いに「ケースバイケース」と回答された42名の方に、「短くまとめたものが欲しい場面」「全文に近いものが欲しい場面」を複数選択して頂いた結果は、右の通りでした。

短くまとめたものが希求される場面としては「体育会・競技会・スポーツの試合」「大会・祝賀会」が挙げられ、全文が求められる場面としては「講演会・演説会」「結婚式・法事」「授業・講義・学校行事」などが目立ちます。「会議」「集会」など、どちらとも言い難い結果が出たものもあります。

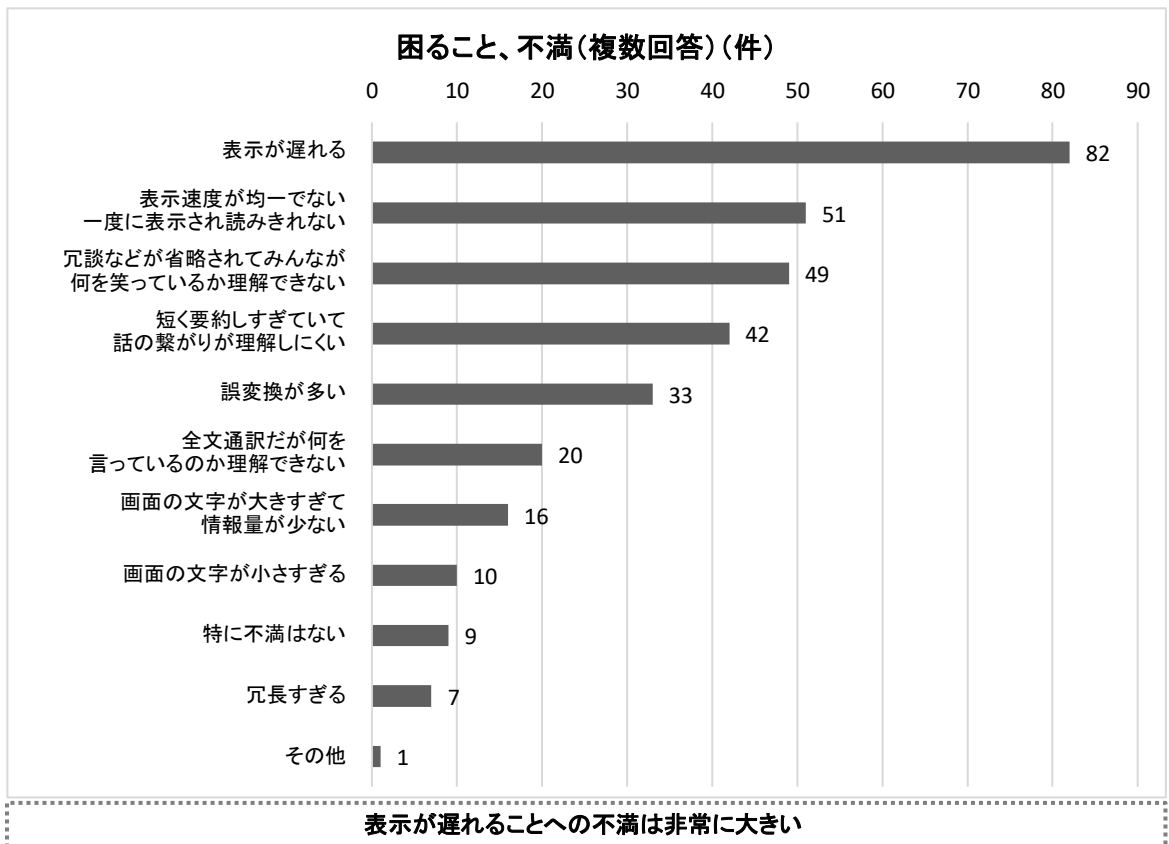


多少の失礼を承知の上で大胆に考察するなら、その場面で音声が重要であるほど全文に近いものが求められているようにも見受けられます。例えば、「体育会・競技会・スポーツの試合」であれば、競技そのものへの注目度が高く、会場のアナウンスは内容さえ伝われば充分、「講演会・演説会」では講師の話を出来るだけ細かく正確に理解したい、「会議」や「集会」では自発的・積極的に参加しているか義務的に仕方なく顔を出しているかによって異なる、といった解釈です。

### 3-5.困ること、不満に思うこと

Q.パソコン要約筆記を利用したときに、困ること、不満に思うことは何ですか？

パソコン要約筆記を利用して、困ることや不満に思うことを複数選択で尋ねた結果は、次のようになりました。



このうち「表示が遅れる」「表示速度が均一でない。一度に表示され読みきれない」は、字幕が表示される速度に対する不満と言えます。両者の少なくとも一方を選んだ方は87名(89%)で、大きな割合を占めました。

一方、「冗談などが省略されてみんなが何を笑っているか理解できない」「短く要約しすぎていて話の繋がりが理解しにくい」は、過度に要約することに対する不満で、両者の少なくとも一方を選んだ方は56名(57%)でした。これに対し、「全文通訳だが何を言っているのか理解できない」「冗長すぎる」の少なくとも一方を選んだ方は22名(22%)で、全文に近いものに対する不満は相対的に小さいと言えましょう。この4つの選択肢の少なくとも一つを選んだ方は65名(66%)でした。内容に対する不満は、速度に対する不満よりやや少なくなりました。

これらに対し「画面の文字が大きすぎて情報量が少ない」「画面の文字が小さすぎる」という、文字の大きさや同時表示文字数に対しては、両者のいずれかを選んだ方が22名(22%)と少数にとどまりました。

表示の遅れや、一度にまとめて表示されることへの不満はしばしば指摘されていましたが、ここまで大きな数字が出るとは思いませんでした。音声を聞き、入力し、漢字変換し、表示するまでの時間をゼロにすることは不可能ですから、一定の表示の遅れはやむを得ません。高度な要約を行う場合には、かなり長い音声を聞いてから入力を始めますので、遅れは更に大きくなります。速度への不満は大きな課題ですが、これを解消するのはなかなか難しいのかもしれない。

短くまとめたものに対する不満は、全文に近いものに対する不満のおよそ2.5倍です。この数字に沿うなら、全文に近いものを提供した方が、利用者に比較的不満を感じさせにくいと言えましょう。

文字の大きさについての不満は少数にとどまりましたが、これは、提供者側が利用者に確認を取る場面も多く、また両者で同じ画面を見て評価することが可能なので、見やすさを共有しやすいことが理由でしょう。

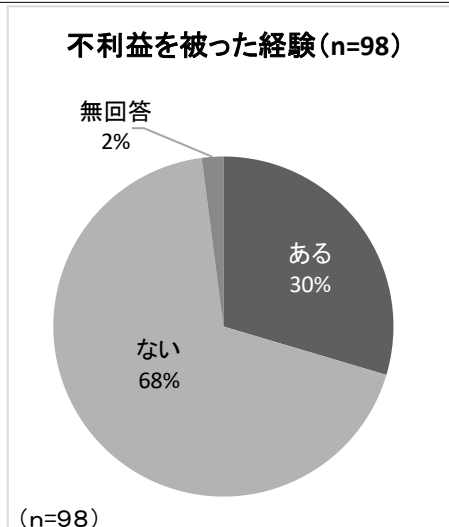
### 3-6.利用者から見た不利益

Q.不愉快になったり悪影響を受けたりなどしたこと(不利益を被ったこと)はありますか？

障害者差別解消法の観点から、パソコン要約筆記を利用していながらなんらかの不利益を被ったと感じたことの有無を伺いました。

結果は、3割が「不利益を被ったことがある」と回答しています。情報保障を受けていながら、なお不利益を被ったと感じる層がこれだけいるというのは、無視できない数字です。

「ある」との回答に対して、具体的な状況を自由に記述して頂いたところ、以下の回答が集まりました。これらは、誤字なども含めてそのまま掲載しています。



- 入力が遅い場合。極端に短く要約しており、話者の言いたいことが十分伝わっていない。内容が話者の内容と異なっている。利用者への意識というよりか、自らをパソコン通訳と名乗って、自己満足しており、それが職業意識と解している入力者が増えている。すなわち難聴者のためというより、要約筆記者自身のためとなっている。手書きではある程度理解できるが、パソコンでもっと入力できるのに、手書きでの要約意識をそのまま継続している。
- 表示が遅れ、読み切れなかった。
- 自分の発言が誤って書かれた(既に次の人が話していたため、訂正できず)。
- 省略された部分に自分のことがあった。ある意味で差別されたと思う。
- 例えば、支援の実施地域等、すべて記載せず、大体のところを記載して、後は省略してしまうので、自分の住む地域が実施していることが理解できない。など、
- 話者が言っていない言葉をスクリーンに出され、話者がその言葉について質問されて困っていたこと。
- 会議などで自分が話した通りではなく要約されすぎて、こんな事言ってないのにと、がっかり。話す気持ちが失せました。
- 手話通訳を頼んだ場合はパソコン通訳手配ができないと言われたことがよくある。
- 予定の日付を間違えていた。
- 学会のシンポジウムで発言の機会を与えられたが、タイムラグがあるために、順番が回ってきても他の発言内容を把握するまでの変な間や、発言のタイミングがつかみにくい。  
学会の研究発表で、「原稿を読み上げる」との表示のみ。スライドで丁寧に説明をしているのに「原稿を読み上げる」のまま。6人もPC要約筆記がいるのに…。
- 情報量が少なく、周りの人と比べ、空気をつかむタイミングが遅い
- 会議のテンポについていけない
- 要約筆記者の倫理に関わる面で不愉快な思いをしたことあり。いつこの講演会に来ていたことを周囲に漏らしていたこと。また、話のつながりがわかりにくく、学業仕事面で少々大変な思いをしたことがある。
- 時間で人が交代したので、話が途中で解らなくなったことがある。
- 話を要約しすぎて、話し手が使っていないような言葉が出てくる。
- 県知事の行政報告会の時、大型TVみたいな画面に表示していたが、後ろに座っていた参加者が「何、これ？字が見えない」とか言っていて、県知事が何度も「前へ来たらいいんですよ」と言ったり、前の方に席を作ろうとしていたにも関わらず、結局その人は前へ行かなかった。  
本当に聞こえない人なら、前の方へ座るはずなので、本当に聞こえない人だったとは思えない。つまり、一部の理解が無い健聴者がそうやって難癖を付けていたと思われる。  
また、多くの健聴者は情報保障に理解が無い税金の無駄だと考えているようだ。文字入力を議事録化することと組み合わせたら、聞こえない人だけではなく健聴者らのためにもなるコスト減にもなると思いますが。  
また、付けてくれた関係者(特にグループや団体)の中には、その手間が面倒臭かったとか費用負担それでも情報保障を付け

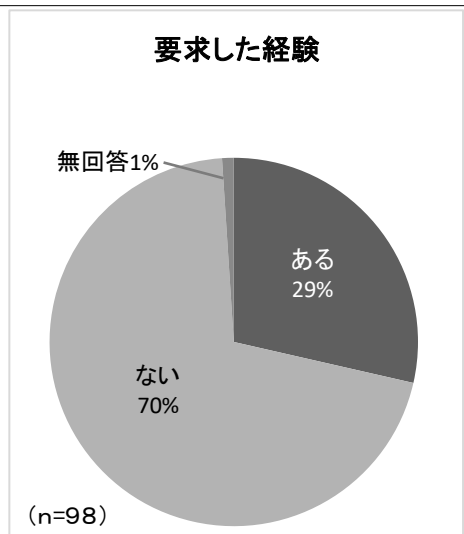
ることの意義を理解出来ないのかで返事しなくなったり、リアルや Facebook などでの付き合いを避けたり(私のコメントを削除したり、グループから削除された)、その後の同様のイベントでの要望に対しても無視するようになったようだ。

- 会場内のみと言われたが、どこにでも伝わるシステムになっていたので会場に行く必要がなかった。
- 講演で話す立場でしたが、会場の質問で重要と思う部分を省かれていました(健聴の知人に聞きました)。その部分を知っていれば、質問への回答は違うものになっていました。それ以来要約筆記は信頼していません。
- 個人的な集まりの時、スクリーンに表示されるのが遅くて受け答えが出来なかった。
- 要約筆者との会議で、要約筆者自身が発話したのを「これは書かなくていい」と通訳者に向かって言われた。とても差別を感じた。要約筆者指導者養成研修の中で、特に模擬講義やモデル講義が全文ではなく要約された情報保障であるのが、数年経った現在でも理解できない。あまりにも要約しすぎて、学びの場であるはずが学びにならない。事前原稿前ロールを活用するなり、難聴の受講生には講義原稿を配布するなどの配慮があっても良いのではと思う。
- ごっそりと内容がもれ、意味がわからなくなった。一度にたくさん出され、読みきれないうちに消えてしまった。
- 回答するのは難しい。情報の格差を感じる。
- 表示されたものが、話し手の言葉と比べて少なすぎて、明らかに聴こえる人よりも情報量が少ないと感じたとき。講演が終わったあとで、健聴者からこんな話があったと聞いて、自分が聞いていないことだったりした場合。会議で、話がかみ合わなくなったりした場合。
- ニュアンスが違う表現になっている。話してもいないことが書いてある。発言内容が難しくよく分からない(聞こえた通りにかなで書けば足りるのに)。

### 3-7.利用者による選択・要求

Q.利用するときに、短く要約するか、全文に近いものとするか、どちらかを要求したことがありますか？

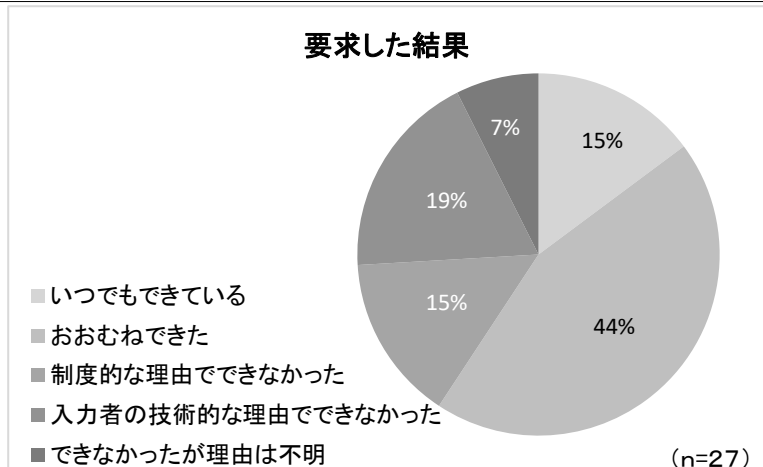
パソコン要約筆記を利用するときに、短く要約する形を望むか、全文に近い形にしてほしいか、要求した経験の有無を尋ねた結果は、右図のようになりました。「要求したことがある」は3割弱でした。3-2.において、「要約することも全文に近い入力も可能なことを知っている」が87%でしたので、「知っているが要求したことがない」が三分の二になります。



Q.要求した通りにパソコン要約筆記を受けることができましたか？

上の問いで「要求したことがある」と回答した27人にその結果を尋ねたところ、肯定的な結果が6割弱、否定的な結果が4割強でした。

本来、情報保障は、自分に合った形で受けられるのが理想ですから、4割強で要求通りにならなかったという結果は、問題を孕むものと言えます。





Q.要求しなかった理由を教えてください

短く要約する形とするか全文に近い形にしてほしいか要求した経験が無い、とした方69名に要求しなかった理由を尋ねた結果を右の表にまとめました。行頭に★を入れたものはあらかじめ選択肢として提示したもので、残りは「その他」を選択した上で自由に記述して頂いています。

結果は、「そのような要求が可能だとは知らなかった」が最も多く、周知の不足から、結果として自身の望む情報保障を受けることができていないものと考えられます。

★そのような要求が可能だとは知らなかった	40
★制度的に要求できないと言われた	4
★入力者の技術が不足してできないと言われた	1
殆どの通訳者と知り合い、私の事情を知っている	3
「要約」なので、もっと簡単にできるとは知らなかった、思わなかった	1
2種類あるとは知らなかった	1
いつもの、要約率で問題ないから	1
いつも要約文になっている。下手の時もあるが。	1
ケースバイケースなので、臨機応変に対処できるなら特に要求はない。	1
とくに必要性を感じなかった	1
どちらでもよかったから	1
パソコンでもわかればということはありません。	1
簡単にできるものと思っていなかった。	1
厚生労働省の養成カリキュラムが要約筆記となっている	1
常に要約にこだわらず、できる限り多くの情報を打っていただいていると思っている。	1
短文だけでも理解できる	1
注文をつけるのは厚かましいから	1
東京では、そうした要求をしても、無理だとわかっているんで…。	1
特に必要を感じなかった	1
特に不満無いから	1
特に文字数が少なすぎると感じたことがない。どの程度省略されているかわからない。	1
入力者の技術がどれくらい知らなかった	1
派遣で来て頂くグループはどのような予約するかは決まっているので、注文は出さない。	1
要約筆記者にお任せです	1
養成講座マニュアルに無いので。	1

### 3-8.利用者からの意見

Q.パソコン要約筆記について、何かご意見などがあれば、なんでもご記入下さい。

最後に、パソコン要約筆記についての意見を自由記述して頂きました。多数かつ多様な意見が寄せられ、利用者からの「ヒトコト言いたい！」がこの質問への回答に集中した感があります。

この項は、集計対象者に限らず、回答者の「聴覚障害者でパソコン要約筆記の利用経験あり」「聴覚障害者でパソコン要約筆記の利用経験なし」「聴者の意見」に分け、回答順に記載します。これらは、誤字なども含めてそのまま掲載しています。

#### ■聴覚障害者でパソコン要約筆記を利用したことがある人の意見

- 上記した通り。パソコン入力に、手書きでの要約意識(自分ではそれが通訳だと勝手に解釈している)を「絶対に」持ち込まないこと。
- 将来的には音声認識との関係も視野に入れ、情報提供を100%にして欲しい。無理が有るかも？
- 情報がより早く、情報量がより多く、前文に近い(PC文字通訳の)情報を求める立場である中途失聴者・難聴者(利用者)へのご対応・ご支援する専門性の高い担い手であるPC要約筆記者(PC文字通訳の方)のご活躍を期待しています。
- 特にない。
- 日頃の活動ができるのもパソコン要約筆記があるかからこそと、感謝しております。
- 全国統一要約筆記者認定試験の合格者に担当して欲しい。技術力のない人に通訳して欲しくない。
- パソコン通訳は手書きに比べ情報量スピードが早いのでとても助かります。でも間違っって入力したときの訂正の仕方、タイミング、理解に苦しむ時も有ります

- 手書きに比べ圧倒的に情報量が多く、読みやすいので、大変ありがたく思っています。同時性を保つためにやむをえない場面もあるでしょうが、省略して良いか、どこが大事と思うかは、利用者ごとに異なります。可能な限り要約しないで書いていただきたいです。重要でないと思われる前置きや言い回しから、話者の人となりがわかります。できるだけ忠実に書いていただきたいです。
- やはり手書の要約筆記とは別物と思う。今は要約でなく全文に近いものがよいと思っているが、文字だけを注視していると、少々疲れるので、文字の見せ方(段落の区切り等)の工夫があるとよい。一度に3、4行出てくる場合とか、逆に抜け落ちる場合もあるので、これには閉口する。話に追いつくことも大事かと思う。
- ある講演では、相手の話が早くて要領を得ない場合、会場の難聴者の了解を得て、相手の話の要点をつかみ、違う言葉に置き換えて入力していた。休憩時間中に、あまりに脈絡もない内容に頭の痛みを訴えたという。特に、磁気ループが有効だったり音声が開聞こえる難聴者には、講義の内容をそのまま聞いてかつ、パソコン要約筆記も確認するといった疲労も大きい。話をそのまま追いつかず、中途半端な情報保障になっていたと思う。その点で、要約も大事だと私は考えている。
- 難聴者にとっては本当に有難い存在です。早く、正しく、読みやすくの三原則を希望するのみです。
- パソコン要約筆記について、難聴者のニーズというものが難聴者自身で共通化されていないことが問題。標準的なニーズを明確にすることが必要。
- 従来の 4:3 投影に固執せず、16:9 の「縦長」投影(もしくは表示)で、画面一杯になったら上から数行ずつ消してまた新しい行を出す方法も考えてみてください。
- もっとパソコン要約筆記者の仕事の認知度を広めて欲しい。
- 要約筆記技術のスキルアップのための研修が制度化できると良いと思います。(もしかしたらすでにあるのかもしれませんが)
- なるべく前文に近い文字表記を望む。ログがほしい。情報が耳から入るから記録できる。目から入ると記録が間に合わない。
- 要約筆記者のレベルを一定にして欲しい。あの時は良かった、この日は悪かったなどがないように。
- 人工内耳を装着していますので、ほぼ、マイクを通した声も耳に入りますので、目の前の要約筆記では、耳に入る言葉と、違う文章が表示されていて、理解に苦しむことがあります。
- また、ようやくしすぎて、内容が理解できないこともあります。パソコン要約ひいき者が手を休めているのを見ると、もっと、入力して欲しいと思います。
- 異動を要する場面など、手書き要約筆記と使い分けをしているが、情報量か本当はいつでもパソコンを利用したい。パソコンもどんな場面でも使いがってがよくなるよう工夫、研究を進めてほしい。
- 手書きより分かりやすいが、速さでは、少し遅れますね。
- パソコン要約は個人で頼み難い、最近医療フォーラムとかいろいろな講演が増えたけど、主催者側で自主的にパソコン要約をつけるよう、貴団体から周知啓蒙を行ってもらえたら嬉しいです。聾協とかに所属していないので、個人では活動出来ない。又、講演とかを手話で理解するのは非常に難しい、手話は会話向き、パソコン要約の普及を切に希望しています。よろしく願います。
- 話のスピードに追いつかず、飛ばして筆記することがよくある。
- 話の内容が詳しく分かるように書いてください
- 短くまとめた文でいいので、ゆっくり流れていくようなスピードで表示をお願いします。
- 年齢と共に、読む力が落ちていることを実感している。若い頃は全文入力を要求していたが、現在は読み切れないときもある。全ての人にとって「よい」パソコン通訳は、難しいのでは…とも思うようになってきた。
- 公的派遣は、全要研の流れによって養成されているので、当然“全要研的”な要約になると思う。それに“竿”さしても詮無いこと。なぜなら、派遣で来る要約筆記者の一存で、全文入力、要約入力の何れかに決める権限は持っていない。また、参会者である難聴者自身が、難聴の度合いによって全文入力、要約入力に分かれて、一律に“全文”あるいは“要約”と決めることはできない。個人的には全文を希望するが、と言って全文を読んでいるわけではない。ある程度聞こえるので、聞こえなかった時だけ、要約を見る。だから、全文なら話の流れを読み取れるが、要約されると話の流れが分からなくなってしまう。
- 将来的には音声認識との連携も視野に入れ、情報提供を 100%にして欲しい。
- 話し手の通りに、出してください。言葉を間違えても、直さずそのまま出して。
- 交通事故に出会ったら、手話通訳、パソコン通訳派遣するのに時間が掛かりがち。リアルタイムに通訳できる体制が欲しい。遠隔通訳などの導入。老体の人でも足労なしにというサービスが欲しいね。あるいは話の分かる人分からない人などがいるから優しい文章にするか、ありのままの文章にするかなどの選択肢が欲しいですね

- 健聴者から見ても意味不明だと言われた。この要約筆記を見て理解できるのかと言われ、苦笑いしたことがある。
- とにかくタイムラグと誤変換を無くしてほしい
- 「要約筆記」という言い方がまずくなってほしいと思います。全文通訳を！
- 一定の流れで文字がスクロールされることを望みたい。
- 要約筆記＝短くするものと受ける最初に念押しをされた。東京などでは前文に近いものが表示されるのに地域に差があるのは残念に思う。
- パソコンは情報が多いのでいいと思う。ただ文字数が多いと読むのに疲れる、追いつかない場合もあるのでケースバイケース
- 手話読み取り通訳者の読み取った音声のパソコン通訳について、何か戸惑った経験はないでしょうか？
- 手話通訳を見ているが、日本語の文章を知りたい時にスクリーンを見る。できるだけ聞こえた言葉はそのまま忠実に出していただけるとありがたい。
- 対象者によって、要約筆記か文字通訳か選択できる権利を保障していただきたい
- 連係入力 of 指導方法の確立
- パソコン要約筆記を担う人々の意識や技術が低く、こちらが妥協している状況がある。だが、養成のあり方や要約筆記者を取り巻く社会的地位の向上などの課題もあり、要約筆記者のみに責任を押し付けるのはお門違いであることは認識している。今後は課題はあるにせよ音声認識をベースとした情報保障がなされるべきであると考えているが、その際、従来の要約筆記者派遣制度や養成講座をどう考えるかについても目を向ける必要。
- どこに頼めばいいのかがわかりにくい。居住地でなくても気軽に依頼できるようにしてほしい。(病気に関する講演に参加したいのに、近くではなく関東から関西まで行かなければいけない場合などがあるので)
- 話し手の言葉を大切に、そのまま出して欲しい
- 難聴者・中途失聴者・ろう者の選択で、一応、ろう者と選択しましたが、聴力や育った環境・考え方・主なコミュニケーション手段など程度の違いはあれど、皆、聞こえないだけです。にもかかわらず、そういう違いなどで仲間だとか排除しているので、なんかアホらしいですね。聞こえないだけという考えで、健聴者中心社会にあえて参加していった方が余程いい。難聴者や中途失聴者の方が比較的パソコン文字入力やノートテイクを含む要約筆記派が多いですが、相当の年配者でも手話を覚えて使っている人も増えているように思います。なんか健聴者みたいな生活をしたとか聴力や考え方・コミュニケーション手段などでろう者とは別だ・手話はあまり使いたくないといった変なプライドなどもあり、仲が悪いようですが。要約筆記(ノートテイクなど)、座る位置にもよりますが、書いている手で書いた字が隠れて(一時・しばらく)読めなかったり、会場が暗い場合(写真や映像を上映する時など)は読みにくいというデメリットがあります。ろう者の多くは情報保障・通訳といえば手話通訳だとかろう文化だなどと主張しているが、手話通訳はろう者だけであることや議事録化にもならないので、手話通訳者や手話サークルに通っている一部の健聴者からはろうや手話に対する理解を得れても、はるかに多くの健聴者の理解を得られない・議会などでの情報保障(パソコン文字入力)が進まない一因になっていると思われる。また、一部のろう者の中にはいちいち「今、何と言った？誰？どういう意味？」などと聞いている人がおり(それ位、後で聞いたり、自分で調べるなりしろよな・・・)、その度に手話通訳者は通訳し直さなければならなくなり(しかも、何度もわかりやすく通訳しようとする)、その分、本来なら聞けたであろう別の話(通訳)が聞けなくなる。手話通訳者は通訳者によって表現方法が違い、手話がわかりにくかったり、ちょっとでもよそ見したりしたら、その時に通訳していた話がわからないとか、発言者の話を全て通訳し切れていない・伝言ゲームのように本来の発言内容から大きくかけ離れてしまっている(充実に通訳出来ていない・下手すると、発言者が話した話とは違った話として伝わってしまう・ろう者がそう受け止めてしまう恐れがある)といったデメリットもあります。手話通訳のメリットは展示説明や野外でのワークショップなどの場合、どこでも通訳出来ることですが、他の参加者そっちのけで手話通訳者と話している形になってしまうという問題がありました。特に舞台での手話通訳の場合ですが、手話通訳者が交代する時に舞台を歩き来しているのがなんか見苦しい。(手話通訳者が発言者の横(1~2m 位横に)に立って、交代の手話通訳者はその後ろに座って、交代して立ち上がって通訳するようにすれば、ちょっとマシになると思います。)ろう者も手話通訳者も友達感覚で喋っているような印象があり、手話通訳者がプロとして仕事していない。手話通訳者なら、聞こえない人のことを理解しているのですから、聞こえない人の立場に立って通訳したり色々サポートしてくれてもいいのに・・・と思います。さらに、ろう者の中には手話通訳しているのに、他のろう者とお喋りしていたり居眠りしている人が多い。そんな状況や関係が嫌い・付き合いなどが面倒臭いし、自分の好きなことや興味あることに取り組んだり行動したり時には家でゆっくりしたり近くのお店へ行ったり散歩したりして済ませる方がいいとかで、あえてどっちにも属しないという聞こえない人達もいます。
- 技術をもがいて正確に素早く文字にしてください

- 主語省略したまま話の内容が変わると理解不能になる。パソコン要約を覚える前に、ノートテイクの要約を学んでいた方が良いのでは？と感じる事が有る。
- その場にいる聴覚障害者に寄り添って頂きたいです。
- 遅い(スライドを指し示しているときなど、文があがってきたときには別の話題になっている)・情報量が少ない・脈略が不明になる・雑談のようなちょっとしたお話が省略される・専門的な話のときに通訳者の要約を信頼できない(実際、意味が不明なときがある)といった問題点があると思います。要約筆記を見ていると、ストレスも生じてきます。音声認識の普及により、多くの難聴者が、要約筆記では満足できないことに気付き始めたと思います。
- 二年前から要望しているが、県派遣ではタブレット等への表示について制限している。他県の状況を知りたい。
- いろいろあるがここでは書かない。
- 私の年齢では、全文入力を読んで、理解するのは難しい。ある程度要約されたものを望む
- 文字の上りが遅く、意図を掴むのに、苦勞する。
- UDトークとコラボできないかな？
- ①全文入力と②要約入力は「文字通訳」をする内容によって決めたほうがよい。構造言語学の用語を使えば、シニフィエ(記号内容、所記)によって①にするか、②にするかを決めたほうがよい。(例)司法(裁判)、大学の講義などには①が要請される。そうでない場合、②でも差し支えないケースもある。
- 聴こえない人の「知る権利」を守るには、要約だけではなく、全文に近い文字通訳が必要なことを訴えたい
- 講演会や会議の時に、パソコン要約筆記があると、内容を理解しやすいので、とても助かります。
- ただ、見かけるのは、いつも多人数の時で、少人数の時は見たことはありません。
- やはり、人件費や機材の設置を、考えると、気軽に利用はしづらいのかな…と思います。
- でも昔に比べると、認識度が高くなりつつあり、今後もっと利用者や要約者が増えてくれることを願っています。
- 日本語は、非常に難しい言葉なので、要約の仕方も学んで頂きたい
- ログには基本的に口述者に権利がある筈。情提(行政)がログを提供するしないを決めるのは著しく公正を欠いている。全要研の規定が諸悪の根源であろう。全要研のウェブ掲載論文の中には「要約筆記者は難聴者の権利に敏感であるべし」としているにも拘わらず口述者の権利を侵害しているのは明らかな自己矛盾である。筆記通訳はもはやボランティア活動ではない。れっきとした事業でありそのサービスに対して対価が支払われると法制化されている。福祉の精神は基本的に不要であり、利用者のニーズに沿って充実・改善が図られなければならない。障害者に対する優しさがやがて指導者的立場から保護者的立場へと立ち位置が変化してそこに優しさならぬ憎悪の感情が芽生えたときに、いじめ・虐待・障害が発生するのは社会のあらゆる場面で見られる普遍的事実である。これは通訳が独占的な事業者であることとサービスの充実・改善が認められないことに起因すると思われる。つまりサービス業ではなくて規定された業務しか提供しないお役所仕事になっているのである。保護下の支配が通訳者と利用者間に持ち込まれてはならない。
- 質問の中でわかりにくかった点＝パソコン要約筆記は短く要約、又は短くまとめたものとはどれほどの字数なのか？ 手書きを思い浮かべてしまいます。手書きは話しことばの 1/5～1/6 に対してパソコン(ヨ)短文の字数を知りたいです。普段私はパソコン(ヨ)は半分以上70%位は書けていると信じています。なので、全文に近いとなると90%位はどの予想です。これですと話し言葉に近い筆記通訳なのかなど。とにかくスクリーンに投影された文字や(ノート)パソコン画面に出た文字がすべてです。
- 話された要約文から内容を理解でき読みやすい表示が何よりです。と言いたいところですが、全文に近い筆記通訳、つまり話された通りに知りたいの思いは昔から変わりません。読みやすさ、目の疲れといったものを考えますと「字数が多いから良いのではない。」と手書き(ヨ)者から言われたことを思い出します。要約＝みじかくまとめること。しかし、これでは満足しませんので筆記通訳の研究に期待します。以上 ※アンケート項目にPC(ヨ)全体とノートPCがあることも入れてはしなかったです。私はどちらも利用しています。特に市役所の会議ではノートパソコン、モニターつきで助かっています。行政も難聴者の立場を理解してくれるようになりました。
- 考えないといけけないのは、コミュニケーションが、きちんとできるためには、中身を抜いてはいけけない。通訳が正しくできていないと難聴者と健聴者の情報の共有ができません。それは差別されているようで悲しいことだ。
- 手書きの要約筆記ですと、前に書いた内容を、ロールを戻せば見る事ができるが、PCですと、再度打ち込むので時間がかかる。
- パソコン要約は表示が遅れる事が多いので質問されたことにすぐ答えられない しかし難聴者にはなくてはならないものです

- パソコン使用不可
- 個人のやり方なのかパソコンの機種によってなのかわかりませんが、“ひとくぎり”？の長文が(話しが)終る迄表示されないのは困る！“て・に・を・は”の欠けで意味が全く変わるので間違えた時はとても困る！話しの間が空いた時(きき漏らした時)等は、アンダーラインでも正直に出してほしい！漢字が不明な時、考えずカタカナでもひらがなでもよいから出してほしい。あまりプライドを持たないでわからない時はそのまま出してもらえば、人柄的にも好意が(通訳者に)湧く。
- 全要研の統一試験はナンセンス(パソコンに対して)なので、早急にパソコン用の試験が出来るように制度案を作ってください。

### ■ 聴覚障害者でパソコン要約筆記を利用した経験がない人の意見

- パソコン要約筆記なるものを知りません。
- どのような申請するか分かりません。
- 使いやすいシステムが欲しい。障害者手帳がなくても不便に感じる人が多いので、補助金などの支援。講演会などに字幕が欲しい。
- 頼み方がわからない。要約筆記は自分でノートとペンを用意だが、パソコンの場合は？

### ■ 聴者の意見

- 聴覚障害者それぞれのニーズにあったサービスが提供されるよう、要約筆記者の知識、スキルアップがなされるとよい。要約が必要な利用者もいる、全文に近いものがほしい利用者もいる。そのことを要約筆記者、利用者が理解し、サービスを展開すべき。
- 適材適所と言われるけれど、遅い一人入力の適所であるのだろうか。疑問。また連係入力でも遅いものがある。遅いし意味がわからないものなら音声認識の方がまし。速くて読みやすい連係入力を nozomu
- 私は PC 要約者だったのでもっと利用者が増えて欲しい。盲ろう者に盲ろう者利用して欲しい。
- 情報保障は100%が基本。要約では完全な情報保障ができない。要約は手書き時代のやむを得ぬ次善策。手書きで実現できなかった完全な情報保障がパソコンならできるので行ったほうが良い。どんな理由にしろ要約という形で元の情報を操作すべきではない。情報は送り手側自身による配慮と受け手側の理解力によって伝達されるので、要約という第三者による加工は望ましいとは言えない。手話であろうと文字であろうと情報保障の考え方に変わりはない。
- 自分の聞き取れなかった箇所を確認したいのに、そういう所が記述されない。

以上